



みなさん、こんにちは。ヌーソロジー研究所の半田です。きょうもよろしく申し上げます。

過去2回の研究発表の動画では、ヌーソロジー研究所がまだスタートしたばかりということもあって、まずはヌーソロジーというものが一体どういった思想なのかということについて、簡単にお話をさせて頂きました。古代ギリシアにおけるフィシスという自然観や、それを存在論の哲学で奪回しようとしたハイデガーの話、そして、プラトンのイデア論の話など、いろいろな話題が出て来たと思いますが、僕自身がみなさんにお伝えしたかったことは、前回の最後に方にした内容ですね。どういった内容だったかと言うと、ヌーソロジーとは現代科学の最先端でもある量子論を通じて、物理学と哲学を存在論的な観点から接続させる思考体系になっているということです。まあ、ひとことで言うなら、「存在論的量子論」とも呼べるものを具体的に立ち上げていくことが、ヌーソロジーの基盤となる内容と言っているものになります。



今回はこうした内容に入っていくにあたって、私たちがふだん空間と呼んでいるものの基本的な 2 つのあり方について、ちょっと話をしてみようと思います。この話の前提には、哲学で言うところの、認識問題と言うところが、大きく関わっています。認識問題と言うのは、主観と客観の一致は果たして可能なのか、という問題です。

20 世紀に入って、フッサールの現象学などが出て来て、この問題に関してはすごく前進はしたのですが、まだ哲学においては、完全な解決は見えてはいません。近代以降の哲学は、そのほとんどが、この認識問題を中心にして推移してきたと言っても過言ではないでしょう。それほど、この問題は、哲学にとってはとてもとても厄介なものになっています。ニューソロジーは、前回もお話したように、21 世紀という新し時代の存在論として、実在論と観念論の統合をも目指しているわけですから、この認識問題にも当然ながら、深く関わっています。もっと言うなら、主観と客観の一致は果たして可能なのかという問題の提起どころか、より積極的に、主観と客観の一致を可能にするような、新しい空間認識のあり方を模索していくのがニューソロジーのメインフレームとなっていると言っていいかもしれません。見るものと見られるものの一一致を達成する。そういった世界についての全く新しい認識の仕方を作り上げていくということですね。ただそのことについてみなさんに正しく理解を進めて行ってもらうには、前もって現在の私たちの主観と客観というもののあり方について、空間的な観点から、しっかりと整理していく必要があります。今回はまずその辺りのことからお話してみたいと思っています。題して「主観空間と客観空間の狭間に潜む存在論的差異について」です。ちょっと難しいけどね。よろしくお願ひします。(4:45/26:08)

Research  
Announcements  
#009

主観空間と客観空間の間に潜む  
存在論的差異について

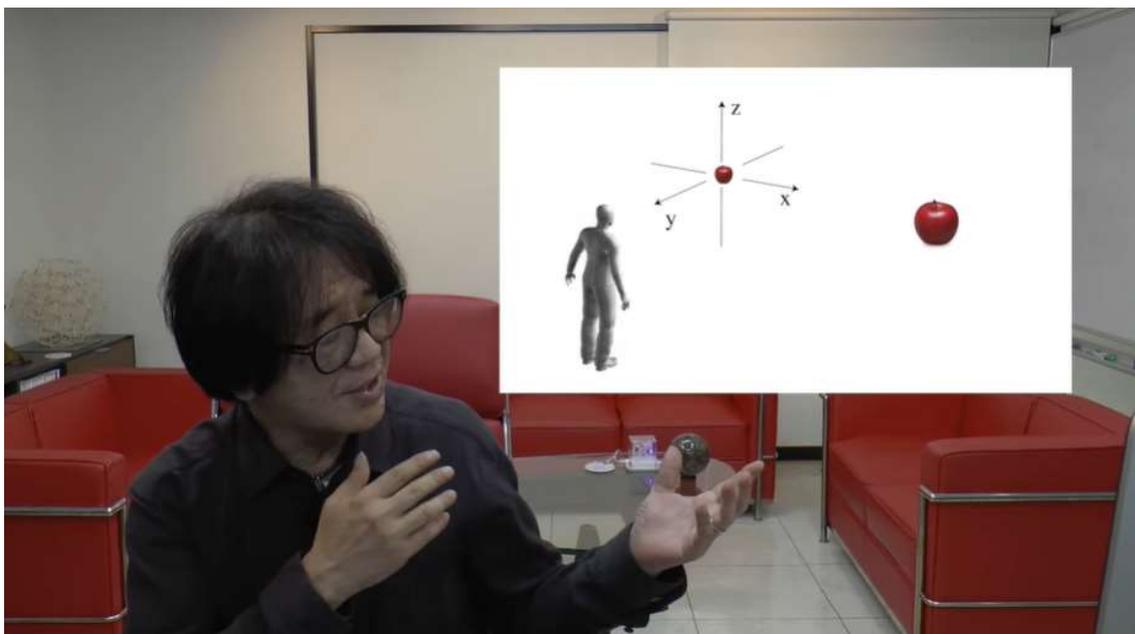
 武蔵野学院大学ニューロロジー研究所

announcer 半田 広宣

主観空間と客観空間の狭間に潜む存在論的差異について

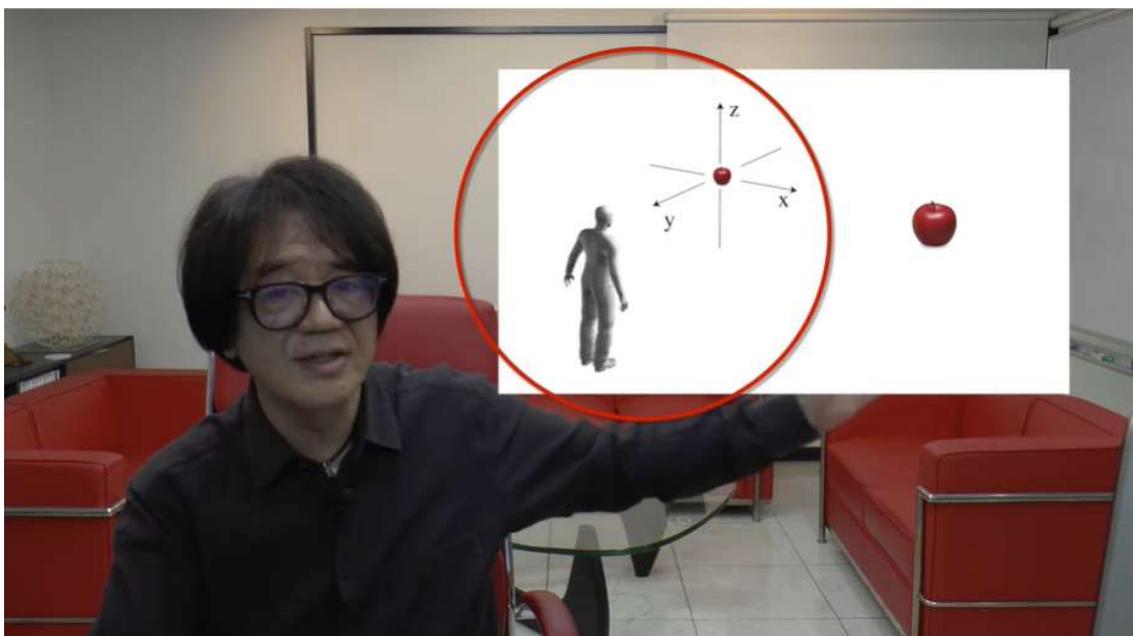
半田 広宣

では、早速始めましょう。まずは、ここに挙げる2つの図をご覧になって下さい。これらの図は、私たちが自分という存在を認識するためにあたってイメージしている2つの空間のあり方を示したものです。



意識経験における2つの空間のベーシックと言っていいでしょう。じっくりとご覧になれば、その意

味合いはすぐにわかると思います。まずは左の図。

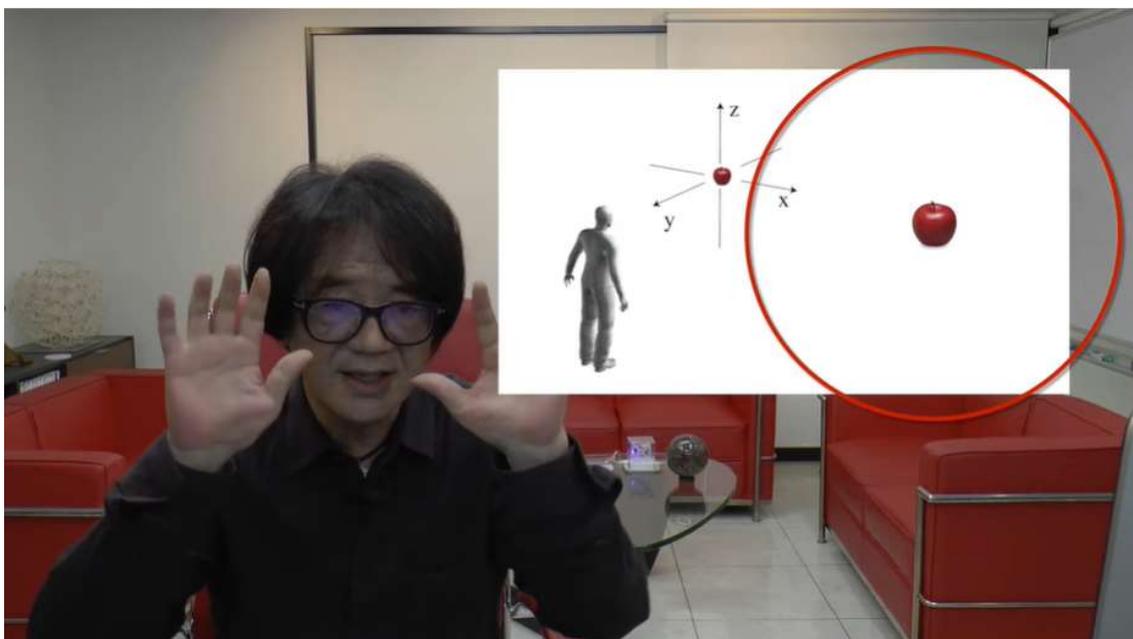


この図はご覧の通り、自分が外部の空間に包まれて空間の中に存在していると考えているときの空間です。要は外延的な空間のことですね。ここでは空間は広大な延長を持つ広がりのようなものとして認識されていて、自分はその中に位置する物質的な存在、つまり、肉体として把握されているのがわかります。この場合、この肉体としての私という存在は、その他の対象物、この図で言えば、リンゴならリンゴとともに空間の中で並列的な位置を持つ存在としてイメージされているはずです。これは、私たちが客観空間と呼んでいるもののイメージに当たりますね。

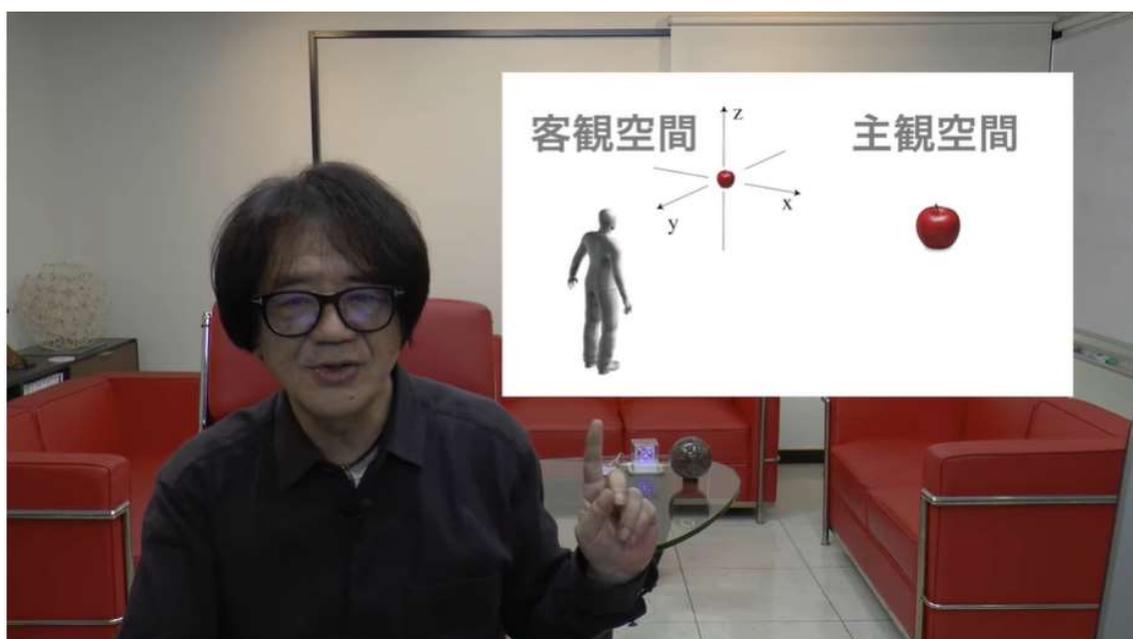


一方、右側の図で表現されている空間の方は、私自身が実際に知覚している空間になります。左

側の客観空間の中で並列的なものとしてイメージされていた私の肉体とリンゴという関係は、こちら側では見えることと見えるものの関係となって表現されています

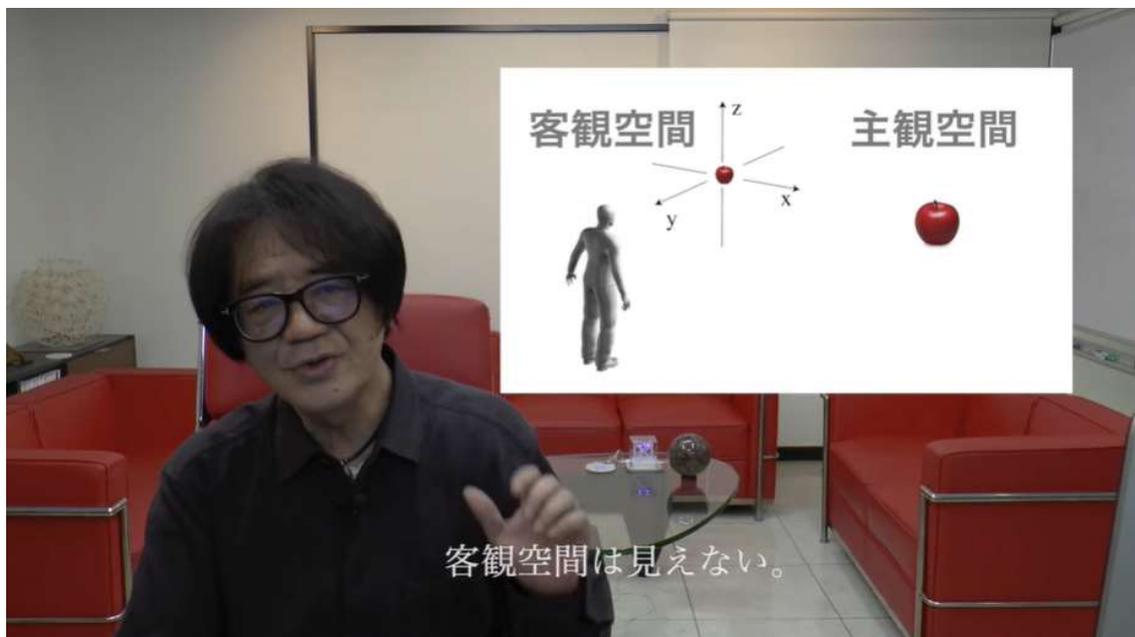


左側の空間とは違って、自分の頭部や顔がありません。特に、自分の目に至っては、自分の目を自分で見ることは原理的に可能なわけですから、この空間では目は決して見える対象にはなり得ません。多少ちょっとまどろっこしい言い方になってしまいましたが、その意味で左側の空間を客観空間と呼ぶのであれば、この右側の空間は主観空間とも呼べるものになっていて、これら客観空間と主観空間の2つの空間は区別して考えなければいけないということがわかります。



ゲーム用語で言うなら、TPV (Third Person View)とFPV (First Person View)、三人称視点の空間と

一人称視点の空間の関係になりますね。以上のことから、次のようなことが言えます。つまり、客観空間というのは、三人称視点ですから、私が実際に見ている空間ではないということです。客観空間は見えないわけですね。



この空間はいわば私を外部から見た、外側から見た空間になっていて、そのような空間を私たちは普通、外の空間と呼んでいるということです。一方、右側の空間の方は、まさに私が生身の身体として生きている生の現場としての空間であり、この空間はさっきも言ったように、そのまま見えることとして働いている空間になっています。左側が自分をそこから見ている外の空間だとするなら、右側の方は自分がある意味内側から見た内的な空間になっているということなんです。

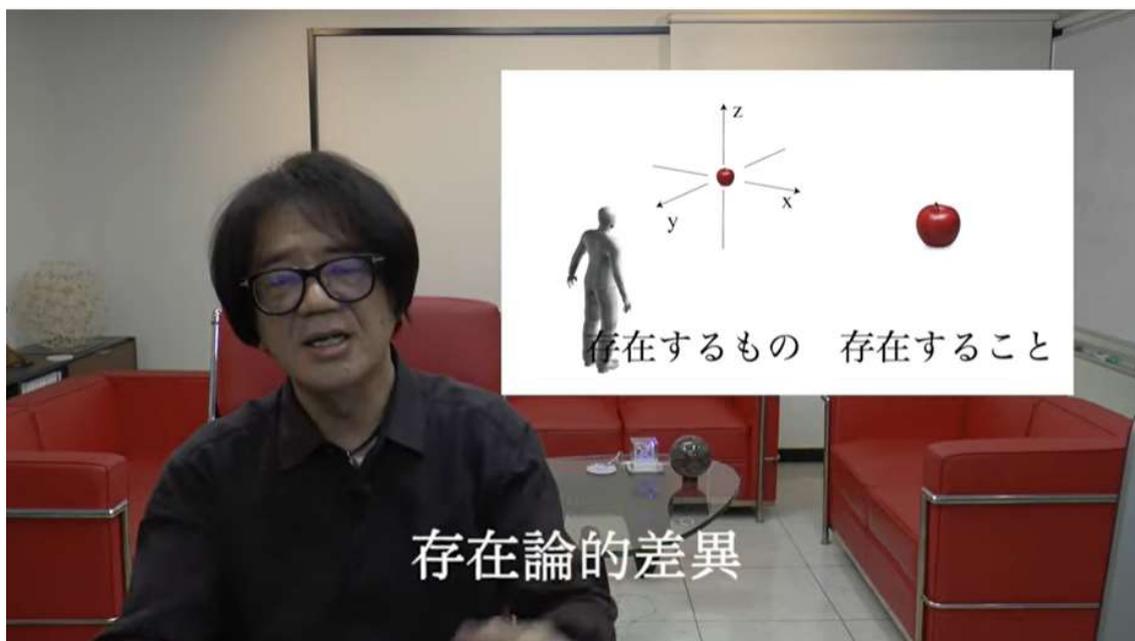


いずれ、この研究動画シリーズの中でも、頻繁に登場してくることになると思いますが、ニューロロジーが多大な影響を受けたジル・ドゥルーズというフランスの哲学者がいます。彼は、この右の図で表した主観空間における、眼の現実的なあり方でも——あり方とでも言うのかな？——、それを強調するために、おそらくそうだと思うんですが、「眼とはスクリーンである」という言い方をしました。面白いですね。

普通、眼はカメラに喩えられるでしょ？ それは私たちが眼のことを、左側の客観空間の中で眼球という物質的対象として認識しているからです。しかし、右側の主観空間においては、眼はもはや対象ではなく、見えることそのものとしてのスクリーンになっているわけですね。このような挑発的とも言えるような表現を通して、ドゥルーズが何を言いたかったのかと言うと、ここに示した客観空間と主観空間の間には違いがあるということなんです。それもこの違いは絶対に乗り越えることのできない違いなんです。哲学ではこのような違いのことを、存在論的差異と呼びます。差異、違いということですね。

この存在論的差異という言葉については、いずれこの研究動画の中でも頻繁に出てくるようになると思いますが、とりあえず今は、存在するものと

存在することの間にある違いといったような意味で理解しておいて下さい。これは元々ハイデガー哲学に由来する言葉です。



さあ、ここで再度考えてみましょう。現在の私たちの一般的な空間認識は、今お話したような客観空間と主観空間の間にある違いにほとんど気づいていません。どういうことかと言うと、例えば、科学が普通空間と呼んでいるものは、客観空間のことですから、ここで言うなら、左側の図で示した空間に当たります。わかりますよね？ 宇宙という巨大な空間の広がりの中に今こうして私の肉体が存在し

ていて、その目の前に、例えば、リンゴならリンゴがある、そういう空間イメージの中で、私たちは自分と世界の間を関係しているはずだ。

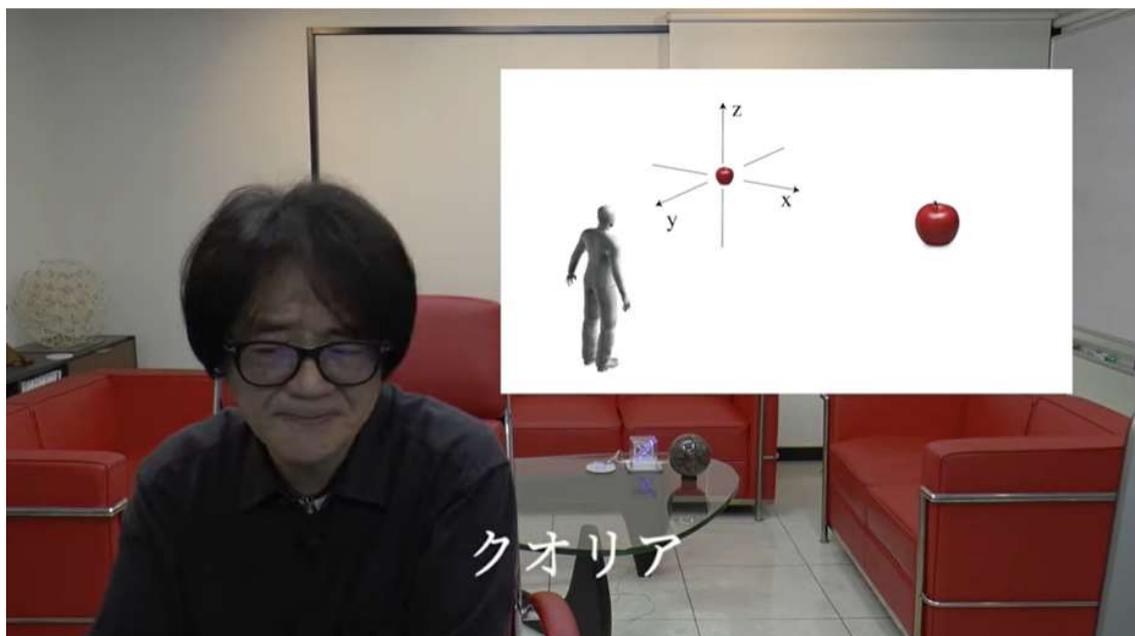
ですから、このような概念の枠組みの中で空間を捉えてしまうと、当然こう見るという知覚経験に関しても、教科書に載っているような物理的な説明に終始してしまうこととなります。つまり、可視光線がリンゴの表面に当たって、そこでリンゴが赤色の振動数に当たる光だけを反射してきて、その反射した光が、眼の中に入って、その刺激が視神経を通して脳の視覚中枢にまで到達し、脳内のシナプスの電氣的発火によって私の脳の中に赤いリンゴの像を結ばせているといったような説明です。これは今や私たちの中では常識と化している、脳の中で私たちの意識は生まれているという考え方です。しかし、これだと、その脳の中に生じたリンゴの像を見ているのは一体誰なんだ、脳の中に小さな小人でもいるのかみたいな、そういったような、悪循環に陥ってしまうわけなんです。こうした現代の脳科学における意識観を認知科学者であるダニエル・デネットは、皮肉を込めて「カルデジアン劇場」と呼びました。カルデジアン劇場というのは、デカルト主義者たちの劇場という意味です。



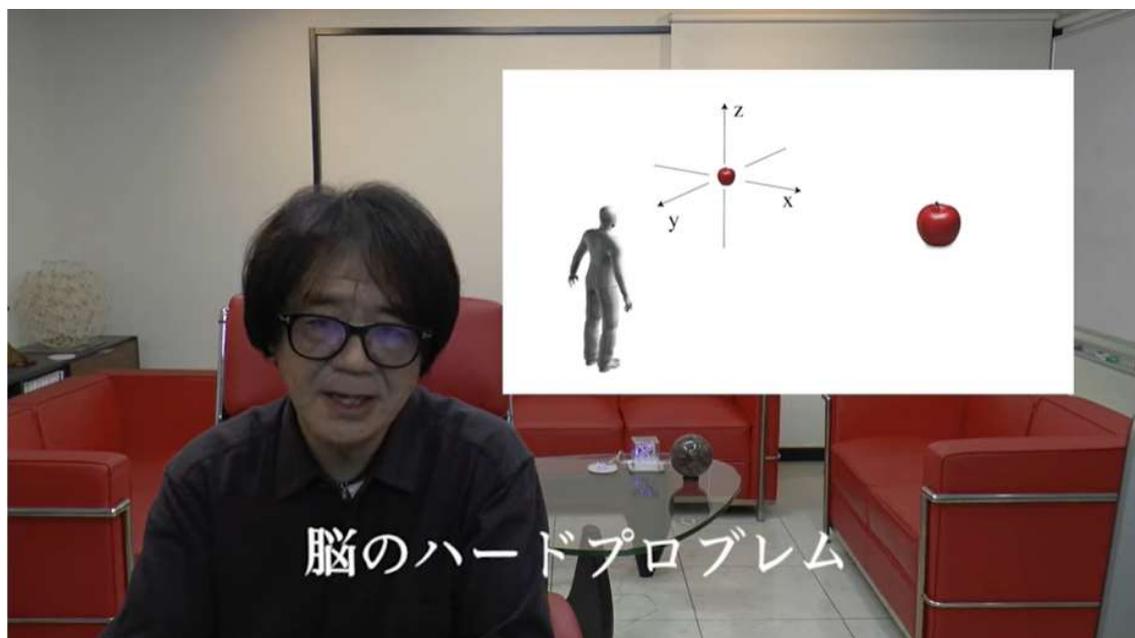
というのも、脳科学者たちは左の図のような配置で相変わらずデカルト以来の主客二元論を前提にして物を見るということについて考えているからです。デネットは、脳の中の特定のニューロンの中に意識する私といったような主体を発見できるかのような思い込みは今すぐに捨て去るべきだと言っています。考え方自体が大元から間違っているということなんですね。実際単なる電氣的な化学反応の集合体である脳からですよ。

右側の空間で表現されているような主観的な認識経験というものが一体どうやって生まれるのでしょうか？ つまり、リンゴならリンゴの赤さの経験や甘酸っぱい香りの経験などといったものが、単なる物質としての脳がどうやって作り出すのでしょうか？ 視覚や嗅覚などにおけるこのような

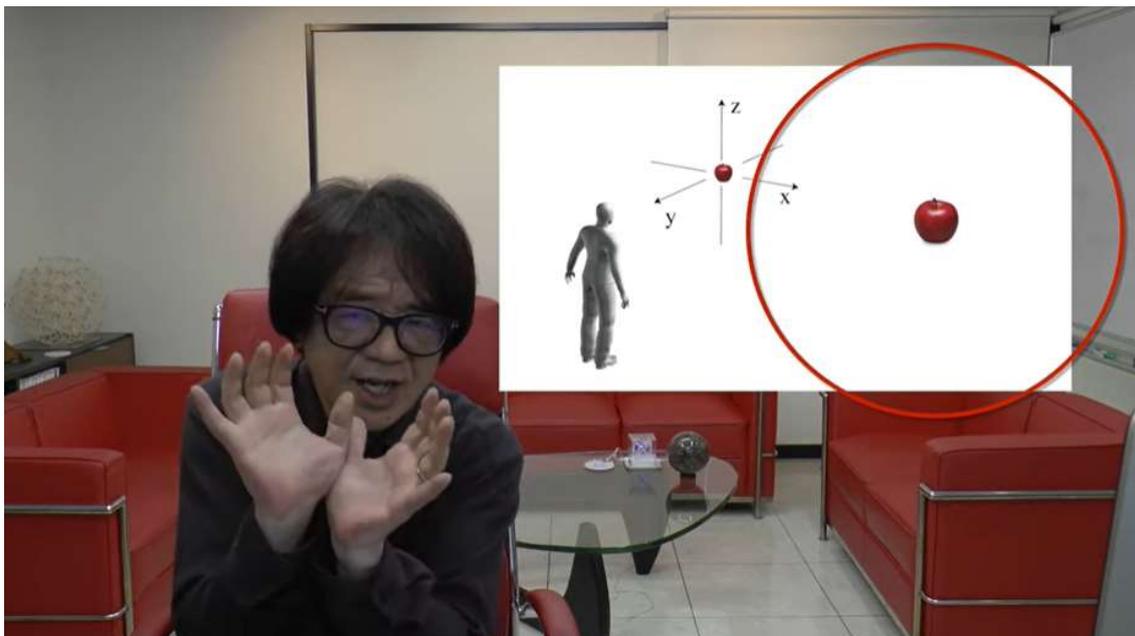
感覚的質感を、脳科学では今「クオリア」と呼ばれています。



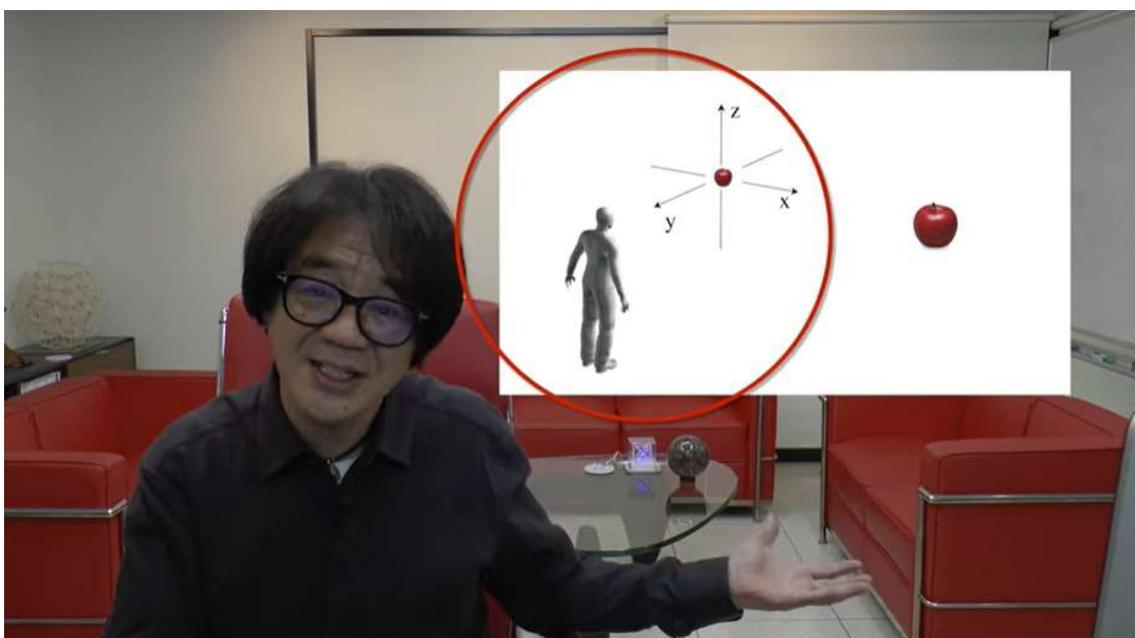
こうしたクオリアの世界については、もはや外部の物理的な仮定から観測する方法というのは一切存在していないんですね、本当は。脳科学者たちの間ではこの問題は「脳のハードプロブレム」とも呼ばれていて、科学では永久に解決できない問題ではないかとさえ囁かれています。



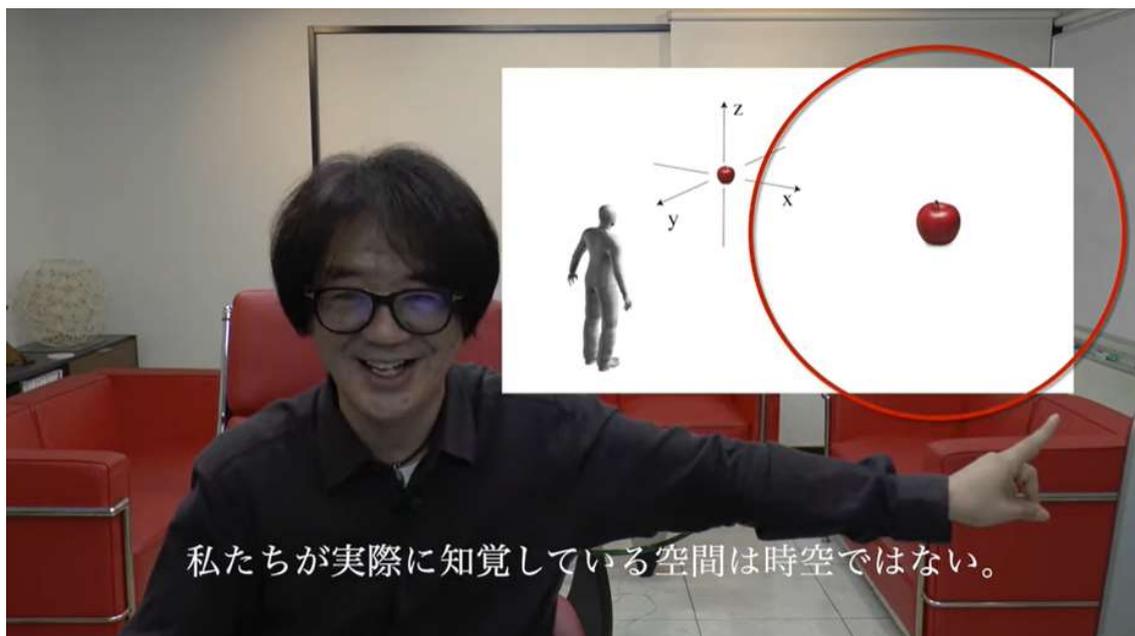
そして、この問題は当然のことながら、哲学の問題とも深くつながってきます。というのも、もうわかりますよね？ この右側の図で表現されている空間っていうのは、他の誰とも交換することのできない、まさに「わたし」というかけがえのない意識、つまり、「実存」が息づいている空間でもあるからです。



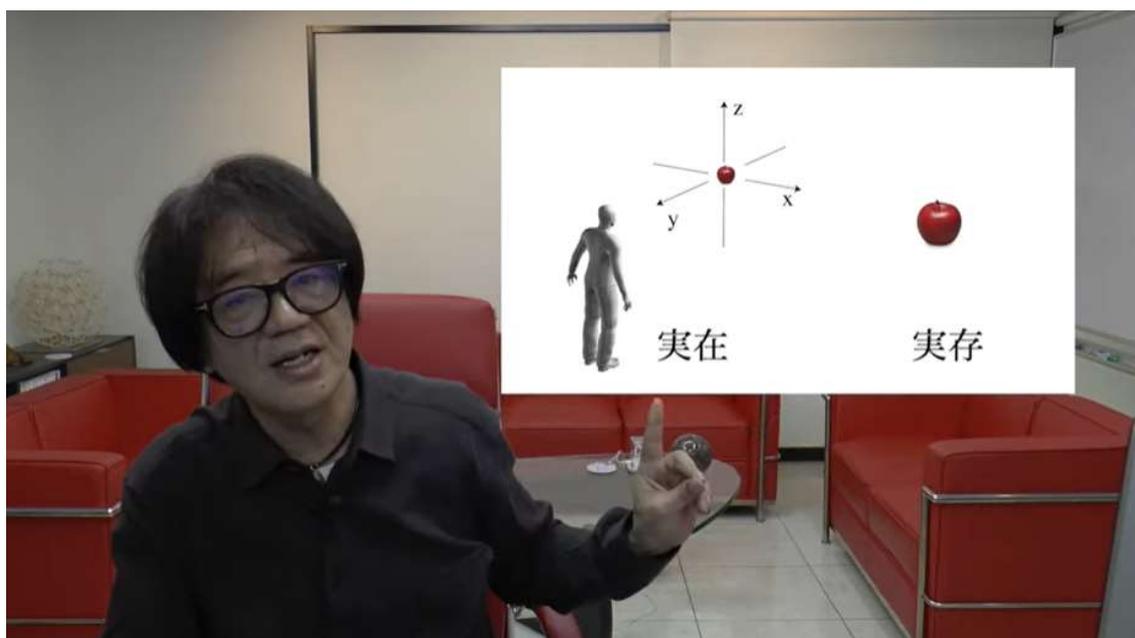
実存とは、ハイデガー的には脱自の意味があります。脱自とは、言い換えるなら、実在としての自分から抜け出しているといったような意味です。なんか魂のようなイメージですね。面白くないですか？



哲学では、普通この左側のような空間の世界のことを「実在」と呼んでるんですね。ここは物理学的には時空のことなので、実在なんです。しかし、私たちが実際に知覚している空間は時空ではないです。

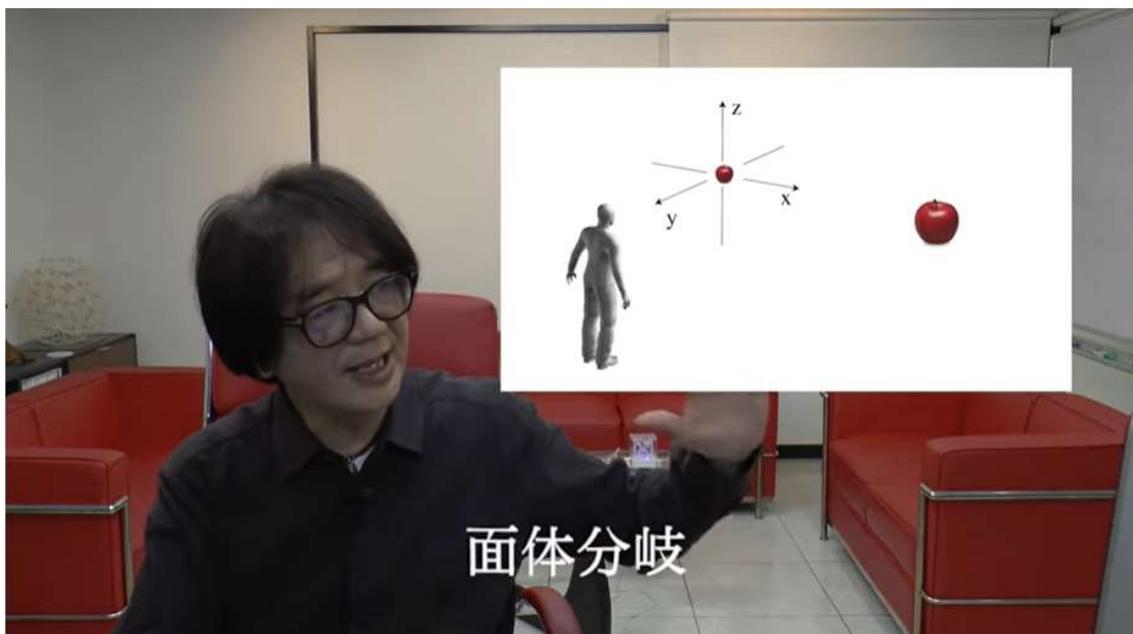


そのことを、この右の図は端的に示しているわけです。わかりますか？ 混乱するでしょう？ 最初。

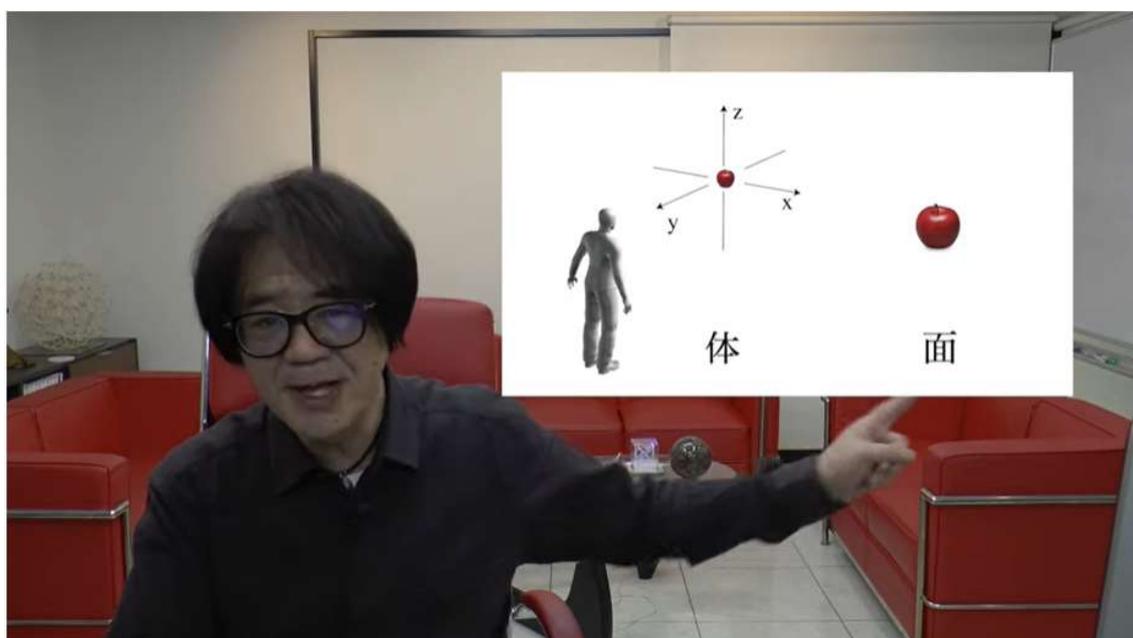


まあまさに存在における「存」と「在」が、「実存」と「実在」とに言葉を変えて、この図の右側と左側の空間で表現されているということになります。

実はこのことに直感的に気づいていた哲学者がいました。それは日本の哲学者の大森荘蔵です。東大の先生だった方ですね。大森はここに挙げた2つの空間の違いを「面体分岐」という言葉でいってシンプルに表現しました。博多明太のことではないですよ(笑)。面体分岐。面と体の分岐です。いいですか？



ニューソロジーの考え方からすれば、この表現は、多少雑な表現ではあるのですが、その反面とても的確な表現だと思います。大森に言わせれば、右側の空間が「面」で、左側の空間が「体」ということになるでしょう。



事物の空間の方においては、3次元的な体が想定されていますが、実際に知覚し得る現場の空間の方は、2次元の面でしかないよという意味がこの大森荘蔵の面体分岐という表現には込められているわけです。大森がこの面体分岐という表現を通して、何を言いたかったのかと言うと、私たちの知覚経験というものが空間におけるこのような二つの場所の分岐の上で成り立っているという、その原理性です。そして、大森はこの面体分岐こそが主観と客観と呼ばれる対置概念の原型になって

いると考えました。つまり、さっきも言いましたよね？ 大森は見えている空間の方は、実は外の世界ではなく心の内の世界になっていると考えたということです。ここはとても面白いところですよ。



さっきも言ったように、科学が意識の在り処を、脳の中の物理化学的な反応の中に見ているのに対し、哲学者である大森は、目の前の空間それ自体を、外界とは全く別物の空間と考えて、それはそのまま内在の世界であると考えたということです。知覚されている世界は見えるがまま、あるがままにおいて、内在——どうですか？ この考え方の革新的なところを、みなさんもおわかりになりますか？ 私たちは普通目に見えている世界を外の世界と考えているわけですが、いやそれは違う、そこは外ではなく、内なんだと言っているということですね。



さすが日本人の哲学者。僕ならここでは拍手喝采を送りたいところです。大森のこの面体分岐の考え方は、人間の意識の成り立ちにおいて、脳だけを重視する現代科学の過剰が偏るの批判として「無脳論」とも呼ばれているんですが、ニューロロジーも意識の座が脳にあるわけではないという意味で、この大森の無能論をより現代的に引き継いだ考え方となっています。

さてきょうの話をまとめておきましょう。私たちが単一の巨大な広がりと思っている、この空間には、空間を客観的なものと主観的なものに分けている、ある秘密の分割が隠されている、そういうことなんです。にもかかわらず、私たちはこの2つの空間における差異を、明確に分けて考える概念をまだ持っていません。先ほどお話した脳科学の例でもわかるように、実在的な物質空間の中に主観的空間をもう同一化させてしまって、その中で意識が働いている場所を一生懸命探そうとしているわけです。この同一化というか混同というか、それをまずは確認し、客観が生まれている場所と主観が生まれている場所の関係を注意深く区別して、大森の面体分岐の概念よりもより正確に幾何学的描像を持ってしっかりと分離させなければいけません。現在のエビデンス主義やデータ主義の下、科学的世界観の一方向的な言説の下に、行き場を失っている私たちひとりひとりの心のためにも私たち自身が生命として生きる実存としての空間を、時空とは全く違った別の場所に見出していかなければならないということです。

ちょっと長くなってしまいました。途中なんか選挙カーとかが来てね。中断しちゃったりもしたんですが、まあ今回の話はこのくらいにしておきましょう。最後に、とある一枚の絵画を、みなさんに紹介して、私の今回の発表を終わりたいと思います。ベルギー出身の画家ルネ・マグリットの作品です。彼はこの作品に『人間の条件』(1933)というタイトルをつけています。意味深ですね。今回の発表の内容に思いを巡らしながら、みなさんもどうぞご覧になってみてください。

## 「人間の条件」

ルネ・マグリット (1933)



【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#009(半田)

ということで、また次回お会いしましょう。どうもありがとうございました。(25:30)(了)

**Research  
Announcements**  
#009

主観空間と客観空間の間に潜む  
存在論的差異について

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 半田 広宣

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#009(半田)  
<https://www.youtube.com/watch?v=a-ymyr73UXI>)